

ウェブ連載記事 ダイジェスト

ウェブサイト『VIEW next ONLINE』で連載していた授業実践に関するコーナーを2026年7月よりリニューアルするとともに、教育課程に関するコーナーを新設しました。本コーナーでは、それらを含むウェブ連載記事の概要をお伝えします。

各記事の全編には、2次元コードからアクセスするか、<https://view-next.benesse.jp/> にアクセスし、「学校教育情報誌『VIEW next』」>「ウェブオリジナル記事」からご覧ください。

📖 学校教育情報誌『VIEW next』

高校管理職・教師向けお勧めテーマ

小・中学校 教育委員会向けお勧めテーマ

▶ 高校版バックナンバー ▶ 教育委員会版バックナンバー ▶ **ウェブオリジナル記事 クリック!**

生徒は必ずしも英語が得意であるとは限らない。そのため田中先生は「英語を知ること、日々の生活が少し面白くなったら素敵だよ」と、生徒に伝えている。物事の見方・考え方が一歩深まり、日常を豊かにする教養としての英語力を習得してほしい、さらには自身のカナダ留学の経験から、世界の文化や価値観を理解し、様々な人々と対話をするためにも英語を学んでほしいと考えている。

STEP	Small Goal	達成度	振り返り	気づきや学び	気づきや学び
1	SNS上の情報に対する自分の判断基準を整理し、他者との比較を通じて自分の考えを整理することができた。	6/5	6/5	「expired」…期限切れ 「ingredients」…材料 「disgusting」…とんでもない	「大げさな説明」記事が読者の関心を引き起こしている。
2	本記事の授業実践の振り返りを整理し、情報発信がプロセスを振り返ることができた。	6/5	6/5	「LINE」記事で多くの人が関心を持っている。とんでもないと思った。それを可能にしている。SNSの活用はとんでもないと思った。	「LINE」記事が読者の関心を引き起こしている。

写真 ラーニングマップの表面には各STEPの学びを記録する。まずは各STEPに取り組む計画を立てる。そしてSTEPが終わる度に「新たに分かったこと」「つまづいたこと・難しかったこと」「他者との比較で変わったこと」を記入し、達成度を3段階で自己評価する。

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。



学習計画をラーニングマップに記入してから学習を開始。各STEPの終了時には、難しかった点などを、全STEP終了後には、Lesson前後での自身の変化や次のLessonで意識したいことなどをラーニングマップに記入する。

ワークシートには、生徒が物事を深く考え、他者との対話が生じるような工夫を施している。例えば「Media Literacy」のLessonでは、「SNSで見た情報を私たちはどのように判断し、どのように扱っていくべきだろうか」をBig Questionとして設定。生徒はその答えを英語で書くという最後のSTEPに向けて、各STEPでは自分の考えを論理的に組み立てることに取り組む。その際、生徒間で対話が生まれるよう、各STEPの問いは生徒の意見が分かれるようなものになっている。

本記事の全編では、授業の進め方の詳細とともに、ワークシートやラーニングマップの作り方、授業中の教師の声かけの工夫、ラーニングマップを基にした「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法などについても紹介している。



たなか・たいせい
同校に赴任して7年目。
英語科主任。3学年担任。

「主体的・対話的で
深い学び」を
実装する
授業デザイン
英語

自己調整しながら学ぶ授業を
通じて、生徒に対話力や
自己表現力を育む

静岡県・私立東海大学付属静岡翔洋高校

田中大成 たいせい

「主体的・対話的で
深い学び」を
実装する
授業デザイン

数学

「なぜ、そうなるのか」と
考えたくなる「問い」を
生徒に投げかけ続ける

長崎県立大村高校 川久保晃一

教科書の内容を生かし、「なぜ、そうなるのか」を探究

「自ら気づき、考え、行動できる能力や課題解決のための実践力を身につけ、地域や社会の一員として活躍する人材を育成」することをスクール・ミッションに掲げる長崎県立大村高校。授業では、教師が生徒に与えた問題を解かせるだけではなく、「なぜ、そうなるのか」「この場合はどうなるのか」「学んだことはどのようなことに役立てられそうか」といった、生徒が考えなくなる問いを教師が投げかけるなど、学校を挙げて授業改善に取り組んでいる。

数学科の川久保晃一先生が、「なぜ、そうなるのか」と生徒たちが考えた

くなるような授業を実現する上で重視しているのが、教科書の内容を生かした生徒への問いかけだ。教科書は限られたページ数で作られているからこそ、「この条件はなぜ必要なのか」「こ



写真 『授業は間違えよう』と声をかけ、失敗を恐れずにグループ内で相談できる雰囲気をつくっている。



かわくぼ こういち
同校に赴任して12年目。
探究SSH企画部主任。数学科。

の条件がこう変わったらどうなるのか」といった、行間を読ませるような問いを創り出す絶好の素材であると川久保先生は考えた。

2次関数の決定について学ぶ授業で川久保先生は、1次関数などを振り返った上で、関数（グラフ）が特定の条件を満たす点の集合体であることを確認し、「頂点が点(2,5)であることだけが分かっている時、2次関数を決定することはできるか」という問いを生徒に投げかけた。教科書を読めば「分かった」つもりになりがちだが、本当に分かっているか、解けないような、教科書の問題とは少し異なる問いを投げかけるのは、生徒の中に「本当に自分は分かっているのか」といった疑問を生むためだ。

本記事の全編では、授業の詳しい流れとともに、「なぜ、そうなるのか」などと生徒が考えたくなる問いを「思考を深める問い」として、全教師が教科を超えて共有できるようにしている同校の取り組みについても紹介している。

本記事の全編には、下の2次元コードから
アクセスしてください。



解説

授業づくりに影響を
もたらす学習指導要領の
次期改訂の論点

学習指導要領の次期改訂に向けて、文部科学大臣の諮問機関である中央教育審議会の教育課程企画特別部会が、教科の枠を超えた基本方針について議論を進めてきた。現行の学習指導要領では、これからの社会で求められる資質・能力の育成に向けて、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が提起された。次期学習指導要領においても、「主体的・対話的で深い学び」の実装が改善の方向性の1つとして示されている。そして、同部会の議論における授業のあり方に影響をもたらす論点として、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」「学びに向かう力、人間性等」の再整理」「デジタル学習基盤を前提とした学びのあり方」「生きて働く『確かな知識』の習得」「障害や認知特性等、多様な実態を踏まえた調整」などが上がっている（*）。

そこで本コーナーでは、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に寄与するべく、同部会の議論の論点に関連する授業改善に先進的に取り組む教師の授業実践を紹介する。目の前の生徒たちを、自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の創り手に育てるために、「学びをデザインする高度専門職」として創意工夫を重ねることが求められるこれからの教師のあり方を、誌面を通じて考えていきたい。

* 中央教育審議会 教育課程企画特別部会「論点整理」（2025年9月）。総則・評価特別部会や各教科等ワーキンググループにおける議論を踏まえて一部更新。

「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

活動の系統化を図り、
ゴールを明確にした
学びを実現

自己探究から進路実現へ。
学年ごとにゴールを定め、
生徒の「できる」を
増やしていく

大阪府立箕面東高校

基礎学力の育成などに力を入れる

「大阪府・エンパワメントスクール」の大阪府立箕面東高校は、2025年度から、「産業社会と人間」と総合的な探究の時間で取り組む探究学習を、生徒が自己を探究する活動を軸とするカリキュラムに刷新した。以前は各授業の前後のつながりが希薄で、生徒の学びが深まらない状態だったため、新たなカリキュラムでは各学年のゴールを具体化するとともに、毎授業の活動を系統化し、スモールステップで調査・探究を積み重ねるプログラムにした。

例えば1年次は「自己探究」に取り組むこととし、年度末のゴールを「600字の自己PR文の作成」に設定。「キャリアナビ」(*)のワークを活用し、自分の関心や得意なことを追究するなど、自己理解を深めながら、生徒それぞれに強みがあることに気づけるように各授業のプログラムを構成した。

生徒の学びを支えるのが、同校の進路指導のキャッチコピー「やるやん! みのひが」に基づく教師のポジティブな声かけだ。教師はどんなに小さいことでも生徒のできている点を褒め、生徒が成功体験を積み重ねられるようにすることを心がけている。

本記事の全編では、同校の探究学習の3年間の流れや大切にしている点、生徒への声かけにおける留意点など、実践の詳細を紹介している。



就職主担
札木 理
ふだき・おさむ



進路指導主事
吉田 拓郎
よしだ・たくろう

本記事の全編には、
下の2次元コードからアクセスしてください。



Turning Point

課題の
設定方法の
見直し

生徒の興味・関心を基にしたり、
教師の専門性を生かしたりして
課題を設定し、
深く、楽しい探究学習を実現

福岡県・福岡市立福翔高校

福岡県・福岡市立福翔高校ではこれまで、2年次からの総合的な探究の時間においてSDGsに関連する課題を設定する探究学習に取り組んできたが、解決が容易ではない問題に直面し、戸惑う生徒がいたことを踏まえ、2025年度からは、探究学習で設定する課題はSDGsに関するものには限定せず、同校の教師が得意分野を生かして課題を設定す

るゼミ形式の「専門探究」、生徒がグループまたは個人で自由に課題を設定し、伴走役の教師と一緒に探究学習に取り組む「自由探究」の2本立てとした。

生徒が自分の興味・関心に基づいて課題を設定する探究学習に変えたことで、生徒の「もっと知りたい」「なぜこうなるのかを考えたい」といった意欲が高まった。以前であれば、生徒が教師に行う、探究学習に関する相談の多くは、「何をすればよいですか」といったものだったが、今では「どついたら仮説が証明できますか」といった質のものに変わった。本記事の全編では、同校における探究学習の課題の設定方法の見直しプロセスや、更新された探究学習に取り組む生徒と伴走する教師の様子、「専門探究」と「自由探究」のコース構成などについて紹介している。



1学年担任・
25年度キャリア教育部
松本 弥生
まつもと・やよい



キャリア教育部主任
徳浦 望
とくaura・のぞみ



指導教諭・進路部主任
武林 哲朗
たけばやし・てつろう

本記事の全編には、
下の2次元コードからアクセスしてください。



* ベネッセが提供する、進路・探究・表現学習を統合的に支援するデジタル教材。

＼そうだったのか！／ 教育課程

教育課程の
柔軟化に向けて、先生方の
疑問に答えます！

今号のテーマ

単位・単位制の仕組み

次期学習指導要領では、多様な子どもたちを包摂する教育課程を各校が編成できるようにするために、現行の仕組みが大幅に見直される見通しだ。そうした教育課程の柔軟化に向けて、現行の学習指導要領下での教育課程の編成に関して、先生方の疑問にQ&A方式で答える連載コーナーをウェブ連載記事として新たに設けた。

今号のテーマは「単位・単位制の仕組み」で、1つめの質問では「現行の学習指導要領下で高校の教育課程を編成する際に押さえておくべき基本事項」について取り上げた。まず押さえるべきなのは、高校では単位制が採用されている点だ。「単位」とは、各教科・科目等について必要となる学習時間を測る尺度であり、高校の学習指導要領では1単位を「1単位時間50分×35単位時間（コマ）」として計算することを標準としている。

また、各教科・科目の内容を無理なく指導できる単位数として「標準単位数」が示されている。高校の教育課程は、各教科・科目の標準単位数を基に、各校が自校の実態に応じて適切な単位数を配当し、卒業までに履修させる各教科・科目を編成するた

め、すべての高校は単位制だ。教育課程としては、学年による区分を設けず、決められた単位を修得すれば卒業が認められる単位制の課程と、学年による教育課程の区分を設ける、いわゆる学年制の課程がある。本記事の全編では、卒業要件における単位数や履修・修得の扱いなどについても解説している。

2つめの質問では「生徒の実態に応じて各教科・科目の単位数を変えたいと思った場合に、現行の学習指導要領でもできること」について取り上げた。端的に回答すると、学習指導要領に示された標準単位数を上回る単位数の配当（増単）は可能だが、下回る単位数の配当（減単）は実質的に難しい。具体的には、図の左側に示した「増単ができる場合の例示」のいずれかにあてはまれば、各校が必要に応じて増単可能だ。

一方、減単は原則できない。ただし履修教科・科目については、生徒の実態及び専門学科の特色等を考慮し、特に必要がある場合には、「数学Ⅰ」「英語」「ミニケー

図 増単・減単の条件

	増単	減単
必修教科・科目	増単できる場合の例示 ・基礎的な知識を十分身につかせるため ・理解の難しい科目の内容を十分習得させるため ・特定の技術、技能等を反復、習熟させるための時間に充当する場合	●原則減単できない 生徒の実態及び専門学科の特色等を考慮し、特に必要がある場合のみ、減単が可能。また、その場合においても、標準単位数が2単位である場合は減単不可
上記以外		●原則減単できない ●以下のいずれかの場合のみ減単可能 ・短い時数で該当教科・科目の目標の実現が可能であると判断される場合 ・教科・科目の特質から一部の内容項目を取り上げることが可能である旨が規定されており、生徒の特性や学校の実態等にに応じてやむを得ない場合

※文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編」を基に編集部で作成。

ションⅠ」は2単位にすることができ、その他の必修教科・科目（標準単位数が2単位のものを除く）についても、その単位数の一部を減じることができる。総合的な

探究の時間についても、特に必要がある場合には、その単位数を2単位とすることができる。また、必修教科・科目以外の各教科・科目で減単ができるのは、図の右側の「減単」において示した2つの場合のみだ。なお、本記事の全編では、増単や減単がどのような場合に、どのように行えるのか、「数学Ⅰ」などの科目を例に具体的に示している。

本コーナーの末尾では、次期学習指導要領において単位制が大幅に柔軟化される見通しを示している。具体的には単位の計算方法の見直しとその1つで、1単位をこれまでの約半分にあたえる「17単位時間」とする新単位の導入が検討されている。また、減単は原則不可とすることを改め、生徒の実態及び教育課程全体を通じた資質・能力の育成に資すると認められる場合は、一定の限度の下で可能となる見通しだ。本記事の全編では、単位制の見直しによって教育課程の編成がどう変わるかを解説している。

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。



監修



文部科学省 初等中等教育局
主任視学官

田村 学 たむら・まなぶ